

純真女子短大 塩塚 瑞枝

目的 一般史の通念によれば15Cは初期ルネサンスと呼ばれるが、服装史においては16C後半の様式をもってルネサンスと呼び、この時代は通常ゴシック時代に入れる学者が多い。15Cに古典的回帰はなかったのか。あったとしたらそれはいかなる意味においてであったか。むしろ、衣服が実生活と直結しているだけに根元的によりルネサンス的なものを表現してはいないか。それが是認されるとしたら、服装史においても15C様式を初期ルネサンスと考えることが妥当であり、ルネサンスそのものの意義に照らしつつ15C服装を考察するものである。

研究方法—文献 美術資料による。

成果 ルネサンスは「再生」を意味し「人間の発見」即ち、人間性の自覚の時代、従って15C精神ないし美的思想がルネサンス的であれば服装はそれが実生活の上に立つ以上、他の文化と並行現象をとるものと思われる。

本稿はギリシャ・ローマにおける身体美との連関から服装的性格を考察し、14Cコチルディー更に14C末からのフープランド、15C前半からのローブ様式の形態的展開と性格を説明し、それが根元的に中世的キリスト教的思慮より脱皮し、肉体美表現への指向性を示す点を探索し、古典的回帰の背後をなす複合的なルネサンス精神を考察し、15C様式を服装史において改めてルネサンス様式として規定づけたのである。